フィールド研究としてのバークレー学派(1)

松　尾　容　孝

(昭和63年6月30日受理)

I　はじめに

小稿の目的は，バークレー学派の研究を素材として，フィールド調査を基本に据えた経験的な文化地理的，文化・歴史地理的研究における一般化の方向について，学説史的整理をはかることである。

空間論の台頭以降，それまでの地理学を個別記述的なとるに足りないものとして扱う傾向が一部にある。たとえば，R．J．ジョンストン(1)は，人文地理学研究を，経験論的方法，「論理実証主義」的方法，人文主義的方法，構造主義的方法に四分類したうえで，経験論的方法は今日ではとるに足らず，後三者が今日の人文地理学研究の上で重要であるとする。また坂本(2)は，空間論以前の地理学を地誌で代表させ，事実の羅列に終始した点を批判した上で，クーンの「科学革命」を引き合いに出して，仮説演繹的な論理実証主義に基づく人文地理学を支持する。

もとより自らの立場の利点を批判さるべき立場との比較できわだたせることはよく行われる。しかしながら，いわゆる伝統的地理学が事実の羅列に終始したあるいは地誌イコール事実の羅列とのきめつけが誤りであることは，農村景観を対象としたドイツ集落地理学の成果(3)や，近代地理学史に関する諸論考(4)からも明らかである。

ただ，そのような発言が出るのにも理由がある。伝統的地理学の成果とりわけ地域研究の成果に対する検討が不十分であったことは，その最大のひとつであろう。そのため，ステレオタイプ化した「事実の羅列」との評価が時として安易に用いられるのである。

19世紀以来の地理学において，人文地理学の諸立場を概観すれば，自然哲学，地理的環境論(生物地理学としての人類地理学を含む)，生活様式論，地域論，地誌，景観論，空間論，行動主義，マルクス主義，人文主義などが挙げられよう。これらはまた，前二者，中四者，後四者に分けて，自然地理学内部の人文地理学，自然地理学を視野におさめた人文地理学，自然地理学を除外した人文地理学に再整理することも可能であろう。中四者はまた，フィールド調査を重視した点でも特徴がある。先の評価は，自然地理学を除外した社会科学としての純化をめざす立場からのもの

であり，生活様式論から景観論までの立場とは基本的に異なる。このように，生活様式論から景観論までの，多岐にわたるアプローチを十分顧慮せずに単純化している点，基本的な立場の相違のために超越的批判の性格をもつ点，で先の評価は不十分である。さらにまた，同じ生活様式論の中でも，微妙に相互に異なる立場が存在する[5]のであり，それらがめざす一般化の方向とその意義が検討されねばならない。そのためには，より内在的に，研究例に即して吟味することが必要であろう。

このような研究史の現状を踏まえて，小稿では冒頭の研究成果に対象を限定して検討する。対象限定は筆者の現在の関心に照らして行った。以下の検討にあたっては，本来，全面的にバークレー学派の研究群を渉猟すべきであるが，膨大な数にのぼるため，とてもその責を果たせない。そこで，まず次善の策として『カリフォルニア大学地理学刊行物』（以下 UCPG と略記）その他によって，概観的にバークレー学派の全体動向を辿るとともに，P.ワグナー&M.マイクセル編『文化地理学論文集』[6]（同『論文集』と略記する）の検討を行うこととする。『論文集』は，「従来のバークレーでの研究者や出身者の研究の蓄積，あるいはその関心とする方向が体系的な展望のもとに提示された」との評価[7]を受けている。また，そのような書であるにもかかわらず，我が国では，佐々木高明による目次を列記した文献紹介[8]があるにとどまる。従ってその分析も一定の意義を有しよう。

バークレー学派の研究に対しては，これまでにも検討されている。[9]そのうち，フィールド調査に基づく成果が地理学全体の枠組で果たす役割に留意して言及されたものとして，H.ブルックフィールド（1964），R.プラット（1959），マイクセル編（1973）などがある。[10]それらの論点に関しては，第4章以降で詳細に検討する。

Ⅱ　バークレー学派の研究の概観

1923年のC.サウァーのカリフォルニア大学バークレー校への就任とその後の地理学教室の状況については，回想や研究によって多くのことが述べられている。[11]本章ではこれらとの重複をなるべく避けて，サウァーら教室スタッフ，出身者の研究を概観しよう。

地理学教室のスタッフと学生の論文発表の場として，バークレー校には，UCPG と，人類学教室や歴史学教室との共通誌『イベロ・アメリカーナ』（以後ＩＡと略記）[12]がある。後者はサウァーら三教室で1932年に創刊された。まず，UCPG についてみていこう。

(1)　ＵＣＰＧからみた特色

UCPG は教室紀要に相当し，教室スタッフの論文と学生の学位論文を主に掲載している（後掲資料１）。第１表はその内容を分野別に分類するとともに，スタッフ・学生の別，教室構成スタッフの変遷を示したものである。ただ，学生の学位論文の掲載については，サウァーからの取得者以外は不明分がある。ホールウェイからサウァーに編集が引き継がれたのは，自身の教授就任の必要から記した２－２「景観の形態学」以後である。

第１表　ＵＣＰＧの内容と執筆者

巻号 注1)	年	地誌	地図	気候・気象	地形・地質	動植・資源	都市	経済・交通	人口	文化地理	その他	スタッフの論文スタッフ名 注2)	学位論文を素材とするもの その学生名 取得年 注3)	スタッフの就任・退職など
1- 1	1913				○							RSH		
2	1913			○										
3	1914				○							RSH		
4	1914			○										
5	1914			○										
6	1914			○										
7	1914				○							RSH		
8	1916				○									
9	1916			○										
10	1917			○										
2- 1	1919			○										
2	1925										○	COS		サウァー就任，ライリー，ラッセルも associate として就任 (1923)
3	1925			○								JBL		
4	1926			○								RJR		
5	1926	○			○							OS		
6	1927		○									JBL		
7	1927				○							RJR		
8	1927					○						OS		
9	1927									○		COS (共著)		
10	1927					○				○		OS		
11	1927				○							RJR		
12	1928									○		OS		
13	1928		○	○								JBL		
14	1928									○		OS		
3- 1	1928						○					JBL	J. B. Leighly 1927	ラッセル転出，ケッセリ就任 (1928)

巻号 注1)	年	地誌	地図	気候・気象	地形・地質	生態・植物	資源	都市	経済・交通	人口	文化地理	その他	スタッフの論文スタッフ名 注2)	学位論文を素材とするもの その学生名 取得年 注3)	スタッフの就任・退職など
3- 2	1929				○								(WJ)		
3	1929										○		OS		
4	1929				○								COS		
5	1930				○								COS		
6	1930			○											
7	1930										○		COS (共著)		
4	1930										○		OS		
5- 1	1931			○									(RJR)		
2	1931										○			F. B. Kniffen 1930	
3	1931										○		COS (共著)		
4	1932				○									F. B. Kniffen 1930	
5	1932			○									(RJR)		
6- 1	1932				○								JBL		
2	1932				○								(RJR)		
3	1932										○				
4	1933			○									JBL		
5	1934			○									JBL		
6				○									JBL		
7								○					JBL		J. ブレック就任 (1936) 注4)
8	1939			○									JEK	J. E. Kesseli 1938	
9	1944	○									○				
7	1935										○			P. Meigs 1932	
8- 1	1940							○							
2	1957											○	〔HLK〕		ロストルントlecturerとして就任 (1945), ブレック転出 (1946) パーソンズ就任 (1947)
3	1957								○						
4	1962								○						
9	1952					○					○			E. Rostlund 1951	
10- 1	1953				○										
2	1954				○									(E. H. Hammond 1951)	
3	1956			○										(C. P. Patton 1953)	

巻号 注1)	年	地誌	地図	気候・気象	地形・地質	動植・資物源	都市	経済・交通	人口	文化地理	その他	スタッフの論文スタッフ名 注2)	学位論文を素材とするもの その学生名 取得年 注3)	スタッフの就任・退職など
10- 4	1957	○				○				○			B. A. Arnold 1954	
11	1955			○									(D. H. Miller 1953)	
12- 1	1956	○								○		JJP		
2	1958	○						○					(C. S. Alexander 1955)	サウァー退職 (1957)
3	1958									○			P. Wagner 1953	C.グラッケン就任 (1958)
4	1961					○				○				
13		欠号？												ライリー退職 (1960)
14	1961									○			M. W. Mikesell 1959	サウァー UCPG の編集から退く。ロストルント死亡 (1961)
15	1963					○		○		○				
16	1964					○						〔TLM〕		
17	1965	○									○		〔P. W. Pease 1960〕	
18	1965					○							(D. R. Harris 1963)	
19	1966					○		○		○		〔JES〕		
20	1970					○								
21	1976					○						〔TLM〕		グラッケン退職 (1976)
22							○					RRR		
23	1979					○						〖CJB〗		
24	1981					○								
25						○						〔JDS〕		パーソンズ退職
26	1987									○				

注1）8－1～4，15はロサンゼルス校，16以降は共同で編集。14以前は8を除いてバークレー校が編集。

注2）スタッフ名で，（　）は WT についてはサマーセミナー担当，RJR は転職で，いずれも教室構成員でない。〔　〕はロサンゼルス校，〖　〗はデービス校，それ以外はバークレー校。
略号は次のとおり。RSH : R. S. Holway COS : C. O. Sauer JBL : J. B. Leighly 1927年の学位取得以前もスタッフとしたのは associate 制度のため。RJR : R. J. Russell OS : O. Schmieder WJ : W. Jones JEK : J. E. Kesseli HLK : H. L. Kostanik JJP : J. J. Parsons TLM : T. L. Mcknight JES : J. E. Spencer RRR : R. R. Reed CJB : C. J. Bahre JDS : J. D. Sauer

注3）（　）はバークレー校でサウァー以外の指導教官のもとでの取得者。〔　〕はロサンゼルス校での取得者。他はサウァーを指導教官にもつ取得者。

注4）J.ブレックはオランダ人。1930～1931年ドクター論文作成のためバークレー校に留学し，サウァーの指導をうけた。ライリーによれば，当時のサウァーの文化景観・文化地理学観を最も具現した研究論文という。

分野別の特色として，ホールウェイ下では，気候・気象と地形・地質の分野に限定されていた。その後1940年以前は，気候・気象，地形・地質，文化・歴史の三分野から成り，スタッフの論文比率が圧倒的に高い。教授サウァーと，サウァーと共に当初は associate[13] としてのスタッフであったJ.ライリー，R.ラッセルのほか，ヘットナー門下のアルゼンチン研究者で1925－1930まで客員教授を勤めたO.シュミーダーの論文がめだつ。ライリーとラッセルは気候・気象か地形・地質の論文，シュミーダーは文化・歴史の論文であった。サウァーは単独では地形の論文，学生（P.メイグスやD.ブランド）との共著では南西部からメキシコにかけてのラテンアメリカの原住民文化に関する論文であった。学位論文としては，ライリーのスウェーデンの都市形態研究と，ラッセルの後任として地球科学を担当したJ.ケッセリの詳細な洪積世氷河の研究の他には，F.ニッフェン，メイグス，ブランドら早くからサウァーによるラテンアメリカ研究（含南西部）に参加した学生の文化・歴史地理学研究がある。

1940年以後，つまり第8巻以後，UCGP の性格は若干変わる。それまでバークレー校のみが編集・発行していたのに対し，ロサンゼルス校が第8巻，15巻を編集し，第16巻からは二校の共同編集，さらにカリフォルニア大学を構成するそれ以外のデービス校，リバーサイド校，サンタバーバラ校等との共同編集が行われるに至る。ロサンゼルス校が担当した第8巻は明らかにそれまでとは異質である。第9～14巻にかけてはバークレー校が編集し，従来の傾向に戻る。ただし，スタッフの論文は12－1のJ.J.パーソンズなどわずかとなり，学生の学位論文が中心となる。その中でサウァーからの取得者の論文は文化・歴史に限定されている。また表示していないが，フィールドの範囲も以前に比べて遠方に及んでいる。

第15巻以降，さらに掲載論文の傾向が変わる。主流は植生破壊や家畜の野生化などの動植物地理学と，きわめて長いタイムスパンの中での複数の時の断面の描写もしくは占拠系列の描写[14]へと移行する。文化・歴史関係としては，R.ラム，J.スペンサー，D.ネーメスを数えるのみで，それらも前期の頃の文化・歴史研究とは異なる。

そこで次に，文化・歴史地理学に属する論文について，その概略を述べ，特色を明確化してみたい。

2－10：シュミーダー。自分自身の2－8を踏まえて，現地史資料によりアルゼンチンのパンパ草原が植民地時代に燃料採取と牧畜のための森林破壊によって形成された文化景観であることを証明。

2－12：シュミーダー。アルゼンチントゥクマン州におけるコロンブス以前からスペイン植民地化にかけての文化景観の変化を検討。具体的には集落・自給農業から商業農業への農地の変化を検討。

3－7：サウァー＆ブランド。アリゾナ州南部のプエブロ遺跡が，文化の回廊地帯としてどの程

度重要で，どの文化の間でいかなる伝播が存在したのかを検討。土器や磨製石器などの人工遺物の分析と現地に残る礎石による集落位置の確認など，考古学的データを用いて文化領域に関する上述の問いに解釈を試み，4文化のフロンティア（伝播前線）を地図化し，各文化の特色をまとめている。

4：シュミーダー。フィールド調査と古文書調査をあわせ，メキシコオアハカ州の原住民の諸農村集落を，地名・農地形態・土地保有形態・土着経済などのタイプを指標に分類。山地と谷との差異に留意するとともに，古代の社会組織の差異が自然条件の類似する二集落の文化的差異をつくったケースについても古文書等の活用により証明。

7：メイグス。1925～1929年にわたる長期間のフィールド調査と文書史料分析によって，バハカリフォルニアに18世紀後半ドミニコ派修道士が形成したミッション網を再構成。そして，伝道以前，伝道過程とその最盛期，伝道以後の崩壊期の三期の「景観」の差異，具体的には農地・作物・家畜・農場形態・人口・交易・交流の諸項目の差異を分析。

9：E.ロストルント。船乗りとしての前半生をもつ彼が，[15]淡水および溯河性の魚類資源の北米における分布を図示し，その上で原住民によるそれらを対象とした漁法と資源貯蔵法などの伝統的技術を調べてやはり図示し，最後にその重複から文化史つまり歴史的な諸民族間の文化の伝播を考察。

12－1：パーソンズ。1953年春夏にカリブ海西部の英語圏島嶼集落を対象に行ったフィールド調査のモノグラフ。イギリスピューリタン時代・スペイン統治下・連邦統治下という植民地化の各時代の政策・生業・集落等の状況，アメリカ人交易者による農業発展（ココナツ商品経済），カメ・アザラシ捕獲・中央島への人口移動・社会文化地理などについて記述。

12－3：ワグナー。コスタリカ西部の町ニコヤの失われつつある自給的な物質文化全般を記したモノグラフ。自然条件と歴史的背景の概観のあと，集落の分布・形態，交通網，土地利用，樹園地と耕地の平面図表現による農作物生産状況，家畜飼養，家屋，農具，乗物，食事，伝統的工芸技術と野生植物加工といった物質文化全般の記述を通じて，伝統的社会の変わりにくい安定構造の存在を指摘。社会変化や社会的事象の諸作用への顧慮はほとんどなく，技術変化や自然景観の活用によりもたらされる経済変化に注目。

14：マイクセル。物質的特色は文化地理学のすべてではないが，地理学者が体系的に研究しうる中心的対象であるとの立場から分析。1955年～57年までの北部モロッコリフ山脈のフィールド調査をもとに，自然環境とりわけ森林植生の歴史時代の概況，ヨーロッパの介入以前の文化史，介入による諸活動とそれに伴う集落形態，農業（農事暦，農作物，農具，家畜，潅漑と水利権，契約と共同作業，相続），狩猟・漁撈，採取，市場，人口移出を記述。それによって，定着集落の形成が土地，とりわけ森林植生に与えた影響を強調。

15：ラム。アメリカ南部においては古くから農業にラバを使役してきたとの通説に対する再検討。諸種資料の統計的操作により，南北戦争後のラバ使役の普及と増加，相当な地域差の存在，北部でのラバ肥育地帯の確立と南部の使役地帯との交易，経済の安定化に伴う馬使役への転換の促進などを明らかにし，その主因を小作や棉作とラバ使役との結合に帰した。さらに，南部におけるラバからトラクター等への転換に対する文化的ないし精神的抵抗の存在を指摘。

19：スペンサー。東南アジアの焼畑について，分布と全体的状況，自然環境および文化環境との関連を概観したあと，農地の利用・管理体系，作物体系，技術体系を分析し，諸類型を設定。

25：ネーメス。済州島を対象地に，初期の高麗下のイメージの刻印を概観した後，李朝下の新儒教主義の景観への刻印をジオマンシーの観点から検討。さらに，農民社会の文化景観に儒教的な徳や宇宙観がどのように構造化されているか，を解明。

以上の概略から，次の点が明らかになった。

① シュミーダーの研究は当初，自然景観の人為的な文化景観への改変の明示に限定されていたが，4では自然条件と社会条件それぞれが文化領域の分化を強く規定することを明らかにするに至った。つまり，文化景観の形成から文化領域の形成へと研究を進めた。

② サウァー＆ブランド，メイグスの研究は，文化領域の設定と同時に文化伝播をも考察し，十分成功しているとはいえないが，文化領域の動態的分布図を結論として提示している。

③ シュミーダーの4，サウァー＆ブランド，メイグスは，歴史資料や考古資料の分析をフィールド調査と有機的に結びつけて文化領域の形成を考察し，かつ文化景観に注目する点で共通している。サウァーらの方が具象的事物としての物質文化とその痕跡への注目が高い[16]ものの，以下の諸研究者と比べた場合，彼らの研究の類似性が高い。

④ ロストルントの研究は，テーマ，分布図の活用の仕方，技術への注目の点で，上述の4人と異なる。文化伝播を考察する点は共通するが，分布図を重ねあわせて経路を導く手法は，物質文化自身の新旧を問うサウァーらと異なる。

⑤ パーソンズの研究は，植民地化の進行が地域の諸側面を改変する状況を描写する地誌的モノグラフの色彩が強い。景観描写も行うが，むしろ経済的展開による地域変化に留意する度合いが強い。その点で，ラムと相通じる。

⑥ ワグナーとマイクセルは文化景観をも含めた物質文化の体系的検討を地理学者の中心的分析手段とみなす点で共通している。特にワグナーはこの点で徹底している。

⑦ ワグナーは物質文化の諸要素（文化景観・生業・食事・工芸や加工の技術など）の複合によって伝統社会の安定構造が維持されると考え，その描写に努める。これは，フランスの生活様式概念[17]のもとで作成されたモノグラフと類似する。また，食事や技術への注目は特にMax．ソールの立場に近い。[18]これに対し，マイクセルは人間の介入による自然景観の改変，文化景

第2表　『イベロ・アメリカーナＩ.Ａ.』の著者・タイトル一覧 注1)

巻 ○:地理学者	年	著　　者	タ　イ　ト　ル	カリフォルニア大学地理学スタッフの論文 注2)	学位論文を素材とするもの 取得年 S:指導教官 サウァー P:指導教官 パーソンズ
①	1932	C.サウァー&D.ブランド	アズタトラン。太平洋岸での先史時代メキシコのフロンティア	○	
2	1932	R.ビールズ	1750年以前のメキシコ北部の比較民族学		
③	1932	C.サウァー	シボラへの道	○	
4	1933	P.テイラー	スペイン系メキシコ人の農民社会：メキシコハリスコ州アランダスの場合		
⑤	1934	C.サウァー	メキシコ北西部における原住民の部族と言語の分布	○	
6	1933	R.ビールズ	アカヘー。デュランゴ州とシナロア州の一山地民族		
7	1934	L.シンプソン	ニュースペインインディアンの行政研究		
8	1934	A.クローバー	メキシコのウト＝アズテカ言語		
9	1935	P.レイディン	ザポテカ族の一歴史伝承		
⑩	1935	C.サウァー	メキシコ北西部の原住民の人口	○	
11	1935	G.ノムランド	ヴェネズエラファルコン州の新たな考古学遺跡		
12	1937	S.クック	バハカリフォルニアのインディアン間での病気の範囲と意味		
13	1938	L.シンプソン	ニュースペインインディアンの行政研究		
14	1938	I.ケリー	シナロア州シャメトラでの発掘		
⑮	1939	P.メイグス	カリフォルニア下部のキリワインディアン		
16	1940	L.シンプソン	ニュースペインインディアンの行政研究　第4巻（No.7と13の合本）		
17	1940	S.クック	カリフォルニアのミッションインディアンの人口動向		
18	1941	S.クック	カリフォルニア州とネバダ州のインディアンの特定集団の食物適応の機構と範囲		
19	1943	R.ビールズ	カイタ族の原住民文化		
20	1943	W.ボラ	植民地時代のメキシコでの養蚕		
21	1943	S.クック	カリフォルニアのインディアンと白人文明との間の対立(1)		
22	1943	S.クック	カリフォルニアのインディアンと白人文明との間の対立(2)		
23	1944	S.クック	カリフォルニアのインディアンと白人文明との間の対立(3)		
24	1944	S.クック	カリフォルニアのインディアンと白人文明との間の対立(4)		
25	1945	I.ケリー	シナロア州クリアカンの発掘		
26	1945	I.ケリー	ハリスコ州アウトランータスカリエスコ域の考古学　第1巻		

巻 ○：地理学者	年	著　　者	タ　イ　ト　ル	カリフォルニア大学地理学スタッフの論文 注2)	学位論文を素材とするもの 取得年 S：指導教官 サウァー P：指導教官 パーソンズ
27	1949	I.ケリー	ハリスコ州アウトランータスカリエスコ域の考古学　第2巻		
28	1949	R.バーロー	メキシコ、クルーア帝国の範囲		
㉙	1948	C.サウァー	16世紀、ニュースペイン領のコリマ	○	
㉚	1949	R.ウェスト	ニュースペイン北部の鉱山社会：パラル鉱山地区		1946年　S
31	1948	S.クック＆L.シンプソン	16世紀メキシコ中部の人口		
㉜	1949	J.パーソンズ	コロンビア西部アンティオケーニョの植民地化	○	1948年　S
33	1949	S.クック	テオトラルパンの歴史人口学と生態学		
34	1949	S.クック	中部メキシコにおける土壌侵食と人口		
35	1951	W.ボラ	ニュースペインの恐怖の世紀		
36	1952	L.シンプソン	16世紀、中部メキシコの土地開発		
37	1953	J.パリー	ハプスブルグ家治下のスペイン領インドにおける公共施設の売買		
38	1954	W.ボラ	メキシコ・ペルー間における植民期初期の交易と航海		
㊴	1957	B.ゴードン	コロンビア、シヌー郡の人文地理学と生態学		1954年　S
40	1958	W.ボラ	1531～1570年におけるメキシコ中部の諸生活必需品の価格動向		
41	1958	S.クック	サンタマリア・イスカトラン		
㊷	1959	H.アッシュマン	バハカリフォルニアの中部砂漠：人口と生態	○	1954年　S
43	1960	W.ボラ＆S.クック	1548年のメキシコ中部の人口		
44	1960	W.ボラ＆S.クック	1531～1610年のメキシコ中部のインディオの人口		
45	1963	W.ボラ＆S.クック	スペイン征服前夜のメキシコ中部の原住民人口		
㊻	1963	C.ヨハンセン	ホンジュラス内陸部のサヴァンナ		1959年　S
㊼	1965	C.エドワーズ	南米太平洋岸の原住民の船		1962年　S
㊽	1966	W.ドゥヌバン	ボリビア、リャノス・デ・モホスの原住民の文化地理学		1963年　P
㊾	1967	J.パーソンズ	アンティオケーニョの海への回廊：ウラバの集落の歴史地理学	○	
50	1968	W.ボラ＆S.クック	1520～1960年のメステカ・アルタの人口		
㊿	1968	C.ベネット	パナマの動物地理学における人間の影響		

注1）vol. 1，2，4～6，9，11～13，15，17～26が手に入らず，久武哲也先生より貴重な資料とご教示を賜りました。お礼申し上げます。

注2）H.アッシュマンはカリフォルニア大学のリバーサイド校、地球科学。他はバークレー校。

観の形成に注目している。それらの景観形成に対する社会的諸条件の作用についても一応考察を加えている。

⑧　ともにロサンゼルス校のラム，スペンサーの研究は，景観への特別な注目はなく，かわりに経済活動を広義の観点で捉え，その分析によって文化や文化領域を明確化する立場にたつ。ただ，ラムの方が農業経済活動と文化的特色とを二元的に捉えているのに対し，スペンサーは焼畑という営為全体を文化もしくは地域を構成するもの換言すれば文化生態系として捉えている点で，両者は異なる。

⑨　ネーメスの研究は，近年の，D.コスグローブ（1984）[19]らの，景観形成主体としての支配者やイデオロギーに注目する立場の典型例である。文化景観をシンボル表象として扱う立場は従来の日常の生産・生活の営為の表象として扱う立場と大きく異なる。コスグローブがサウァー流の文化地理学研究を批判的に解説[20]していることからもわかるように，ネーメスの研究はいわゆるバークレー学派とは言えない。

(2)　ＩＡからみた特色

ＩＡは前述の如く三社会科学教室の共通誌で，タイトルが示すようにUCPGと比べて限定されたフィールドを対象とした論文のみが掲載されている。第２表は，ＩＡの論文一覧である。1932年の創刊以後1948年までは，地理学者の論文はサウァー以外には，サウァー＆ブランド，メイグスの計二論文のみである。一方，バークレー大学では，1946年サウァー主導下に熱帯生物地理学組織，1952年パーソンズ主導下にカリブ海域調査計画が実現し，[21]中米から南米にかけてのより広範な研究テーマ遂行の基盤が確立する。このようにして，1949年以降，ＩＡにおける地理学論文の比率は増加し，特に1960年代には，ボラ＆クックの歴史人口学研究を除く全論文が地理学研究で占められるに至った。

スペイン系アメリカあるいはもう少し拡大してアメリカ南西部を含めたラテンアメリカは，サウァーの生涯変わらぬフィールドであった。土曜日の野外実習授業や春の短期のエクスカーションを除けば，サウァーのフィールド調査は夏期休暇期間に実施され，その大半がアメリカ南西部とメキシコを主とするラテンアメリカであった。その際，少数名の学生も参加するのが普通だったので（第３表），学生も多く当地の研究を深めて学位論文を書くに至った。サウァーのもとで取得された学位論文37本のうち，アメリカ南西部を含むラテンアメリカ研究は実に過半の20本を占める。このうち３本がUCPGに，６本がＩＡに掲載されている。また，サウァーからは孫弟子にあたる地理学者でラテンアメリカを対象にした学位論文取得者は実に56名にのぼるという。[22]従って，サウァーにはじまるラテンアメリカ研究の流れは，バークレー学派の一特色とみ

第3表 サウァーがラテンアメリカで行なったフィールド調査

Period	Area	Purpose	Accompanying Personnel	Source of Funds
【MEXICO AND THE SOUTHWEST】				
1 1926 May–June	Baja California	field observation	S. Dicken, F. Kniffen, P. Meigs	Board of Research, U.C.
2 1928 May–June	N. E. Sonora	field observation		Board of Research, U.C.
3 1928 July	Peninsular Range, S. Calif.	geomorphology		Board of Research, U.C.
4 1929 May–June	Southeastern Arizona	geomorphology, archaeology	D. Brand	Board of Research, U.C.
5 1929 Dec–1930 Jan–Mar	Sinaloa, Nayarit	archaeological reconnaissance	G. Pfeifer, A. Kroeber, P. Kirchhoff	Board of Research, U.C.
1930 Apr–May	N. Sonora, S. Arizona	archaeological reconnaissance	D. Brand, A. Sotomayor	Board of Research, U.C.
6 1930 Dec–1931 Jan	E. & S. Sonora	field observation	J. Spencer	Board of Research, U.C.
7 1931 June–Sept	Mexico City, Guadalajara	archival research		Guggenheim Foundation
Sept–Dec	E. & S. Sonora N. Sinaloa	field observation	L. Hewes	Guggenheim Foundation
8 1932 June–Aug	Arizona, New Mexico	field observation		
9 1933 May–July	Parral, Chih., Chihuahua City, Durango City	archival research, archaeological reconn. in Durango		Board of Research, U. C.
10 1934 June–Aug	Navaho Res., Ariz., N. Mex.	field observation, soil erosion	J. Leighly, A. Normand	U.S.D.A., Soil Conservation Service
11 1935 May–Aug	Mexico City, Sinaloa, W. Jalisco, Zacatecas	archival research, field observation, archaeological recnnaissance	L. Corwin, A. Corwin, R. Bowman	Rockefeller Foundation
12 1938 Dec–1939 Jan	Sinaloa	archaeological reconnaissance	J. Garst G. Eckholm I. Kelly	

Period	Area	Purpose	Accompanying Personnel	Source of Funds
13 1939 May-	W. Jalisco, Colima, S. Michoacan, Mexico City	field observation, archaeological reconnaissance	H. Bruman, I. Kelly	
14 1941 Jan-May	Mexico City, W-cent. Mexico	archival research, field observation	M. Wilder B. Wilder	
15 1944 Dec-1945 Jan-Apr	Mexico City, W. Mexico Oaxaca	archival research, field observation, aboriginal agriculture		Rockefeller Foundation
16 1946 Mar-Apr	Sonora	archacological reconnaissance, early man	E. Haury	
17 1946 July	Baja Calif.	field observation, early man	E. Hammond, W. Massey	
18 1947 Feb	Baja Calif.	field observation, early man	L. Constance, E. Hammond, I. La Rivers, W. Massey, R. Stirton, H. Williams	Associates in Tropical Biogeography, U.C.
19 1947 June-Aug	Northern, Central & Southern Mexico	field observation, native dom, plants food habits	S. F. Cook, J.Sauer H. J. Walker R. Walker	Associates in Tropical Biogeography, U.C.
20 1948 July-Aug	Central, S. Mexico	field observation, native dom. plants	J. Parsons, D. Lowenthal	Rockefeller Foundation
21 1949 Feb	Baja Calif.	field obscrvation, early man	B. Arnold, H. Aschmann T. Pagenhart	Associates in Tropical Biogeography, U.C.
22 1949 Mar-June	Northern, Central & Southern Mexico	field observation, early man	G. Powell, Snyder C. Patton	Associates in Tropical Biogeography, U.C.
23 1950 June-July	N. & S. Mexico-Durango, Coahuila, Tamaulipas	field observation, native dom. crops, natural vegetation	N. Mirov, J. Vann, T. Pagenhart, P. Wagner	Associates in Tropical Biogeography, U.C.
24 1967 June-July	C. & S. Mexico	field observation	Mrs. Sauer	private

Period	Area	Purpose	Accompanying Personnel	Source of Funds
		【SOUTH AMERICA】		
25 1942 Jan–July	Westen South Amer. (Andean countries)	field observation, native agriculture ; status of research & personnel in social sciences	J. Sauer	Rockefeller Foundation
26 1946 Aug.25–Sept. 3	Venezuela	to attend meeting of Pan-American Inst. of Geog. & History, Caracas		U.S. State Dept.
		【THE WEST INDIES】		
27 1950 July	Cuba	field observation, marine terraces		Associates in Tropical Biogeography, U.C.
28 1952 June–Aug	Dominican Rep., Puerto Rico Antigua, ST. Kitts, Trinidad, Venezuela, Jamaica	supervision of student work ; field observation native agriculture	J. Parsons, J. Street, C. Alexander, G. Merrill, C. Johannessen W. Barrett, G. Treichel	Office of Naval Research
		【CENTRAL AMERICA】		
29 1958 Aug	Costa Rica	to attend meeting of International Congress of Americanists, San José		
30 1968 July	Costa Rica	visiting scientist, Organ. for Tropical Studies field course	J. Parsons & students	Organ. for Tropical Studies
31 1968 July	Guatemala	field observation	O. Horst Mrs. Sauer	private

出典：R. West(1979)PP.4～6

なせよう。

そこで次に，スペイン系土着アメリカという限定された対象域の中で，バークレー学派ではどのような研究が行われたかを，IA の掲載論文を通じてみてみよう。

3：サウァー。古代以来原住民の幹線道路であった「シボラへの道」が，植民地化ののちも，スペイン人の探検隊の行程路やジェスイット教団の集落建設地として強い意味をもち，今日新たな装いのもとでやはり幹線道路であり続けていることを指摘。

10：サウァー。歴史資料によりヨーロッパからの伝染病の状態に言及しつつ，初期ジェスイット教団の統計等を用いて，メキシコ北西部の原住民諸部族の人口とその変動を推計。

29：サウァー。コリマ地方の原住民であるプエブロ諸族の分布域，人口，領域構成，土器紋様など物質文化の領域間比較によって，元来のコリマ地方の文化領域を明らかにした上で，金銀の存在により誘発されたスペイン植民の進捗過程と地域変化を描写。

30：R.ウェイト。北部ニュースペインのパレル鉱山を対象に，鉱山開発が，掘削・冶金の技術面，協業・雇用・居住などの労働組織面，牧畜や農業などの生活基盤，金銀地金と域外物質との交換・分配などの商業的関係ないし流通面など，多面的な必要を生じる独特の社会をつくりだすことを具体的に検討。

32：パーソンズ。長く隔絶されていたコロンビア西部アンティオケーニョ諸族を対象に，自然条件，征服前の領域構成，スペイン人鉱山の成立に伴う人工的領域分割と労働力編成，植民地農業集落の形成，現代の土地政策，人口増加，交通網整備に伴うコーヒー栽培地の移動，新たな工業化，などの諸側面を地誌的に描写。

39：B.ゴードン。最初にG.P.マーシュ「人間の作用によって改変された地球」を模した研究であることを言明。コロンビア北西部シヌー郡を対象に，山岳森林地帯と低地潅木地帯の部族間の物質文化（衣服・家屋・農地等）の差異を，初期スペイン人の記録で明示。その上で，諸部族により森林破壊や再森林化が行われ，しかもそれが各地帯の部族の文化と相入れず，部族の交代を惹起したこと，生態学的対応が類似する民族間には，文化的関係さらには系譜関係が指摘できることを推定。

42：H.アッシュマン。バハカリフォルニアの中央部の現在乾燥地で居住もまれな地帯において，かつて高密度で居住していた原住民部族が誰で，どの程度の人口で，彼らを支えていた経済・社会組織がいかなるもので，何が生じ，なぜ消滅したかについての分析を行う旨を明示。この目的に即して，原住民の考古学・身体・言語特色，彼らの生態（経済・技術とその材料・社会組織），人口学的特色（出生率・家族規模・死亡率・人口とその変動・人口密度），人口減少要因等を考古・歴史資料の分析と精緻な解釈により導いている。地域変化を物質・精神両側面から解釈。

46：C.ヨハンセン。ホンデュラス内陸部のサヴァンナ植生の分析により，熱帯地帯でのサヴァンナ化とサヴァンナ地帯での潅木・乾燥地化といった種構成の変化が進行していること，そしてその原因に気候，伐採，地下水位変動，土壌，火山灰，火，家畜飼養があることを指摘。

47：C.エドワーズ。土着の船が原住民時代から今日までどのように残存または形や分布を変えたかを調べるため，パナマからマゼラン海狭までの海岸沿いを14か月フィールド調査。歴史資料に基づいてヨーロッパ人との接触当初には存在していた8タイプの船について，その現在状況を聞き取り，4タイプが利用と造船を続けていることを明らかにし，次いで4タイプの各々の航行ルート，漁場，船の耐久性などの詳細なデータを収集。一方，現存しない4タイプについては，史資料からデータを作成。両者から，全タイプの出現の編年，ヨーロッパ人との接触による変化などを解明。

48：W.ドゥヌバン。ボリビアのモジョスサヴァンナと隣接する森林について，フィールドと古文書の両面から調査。自然条件，考古時代の状況，ヨーロッパ系の現在の民族，接触以前の原住民諸部族，集落形態と交通網，農業や他の自給活動，人口とその変動，それ以外の大地に対する諸活動などの分析を通じて，サヴァンナ居住の特色，自然環境の改変，集落整備，生存活動の全体，モジョスの文化生態の特色，を結論として提示。

49：パーソンズ。コロンビアのウラバ地方を対象に，18世紀以降今日に至るまでの，熱帯雨林低地に集落や交通網が整備され経済活動の充実と居住の安定化が創出される過程を描写。今日段階ではいまだ解決されるべき課題の多いことも指摘。

51：C.ベネット。文書調査と2年8カ月に亘るフィールド調査とによって行われた，パナマの植民期以前，植民期（以上文書調査が主），現在（フィールド調査）の三期における生物環境，動植物状況，農業やその他人間の経済的・生態的働きかけ，についてのモノグラフ。

以上の概観から，次の点が明らかとなった。

① 文書資料とフィールド調査を相互に活用する点でＩＡの研究は共通する。必然的に，スペイン植民期以前，植民期，現在の三時期の対比が可能となるし、起源と伝播、文化変容を研究テーマに含む場合が多い。

② サウァー3は探検ルートの復元と地理的慣性，10は歴史人口学に関する研究で，氏の後の研究のような特色が薄い。29は、UCPG 3－7と同様，考古遺物を文化領域設定に活用している。

③ ウェスト30は，鉱山活動全体をひとつの文化生態系とみなす点で，スペンサーに近い。

④ パーソンズ32・49は，UCPG 12－1と同様，地誌的色彩が強い。植民地化や低地への集落形成など，居住地開発活動に対する関心が推察される。

⑤ ゴードン39は，自身で述べているほどマーシュに近いとは言えない。植生を主要素とする自然条件への対応の一定の型を生態学的対応と称し，これが「物質文化（家屋・農地等）」を強

く規定するとの考えは，環境論的とすらみなせる。

⑥　アッシュマン42は，一定の人口密度のあった地域の崩壊という，地域変化そのものを，描写ではなく説明づけようとする研究で，UCPGやＩＡの他の論文にも類似するものはほとんどなく，その点で特徴的である。例えばパーソンズの地域変化についての研究は現状への推移を扱っているので描写となってしまうし，スペンサーやウェストらの文化生態系についての研究は生態系の均衡を扱うためドミナント要素に基づく地誌[23]的性格を帯びやすい。これに対して，アッシュマンの研究の特色は，いまだ未知の均衡の破壊を分析・解明する点である。

⑦　ヨハンセン46やベネット51は，UCPG 18と同じく，マーシュの研究の立場，つまり地球の生態ないし自然生態に対する人間の作用を扱う研究である。

⑧　エドワーズ47は，広範な民俗（族）学的データの収集という点でロストルントに類似し，物質文化要素の編年を行う点でサウァー＆ブランドらに類似する。つまり両者を結合した性格をもつ研究である。

Ⅲ　『文化地理学論文集』の構成と内容

前章では，UCPG，IAという重厚な学位論文を多く含み、明瞭で永続的な著者の考え，視点を示すとみなせる論文の検討を通じて，バークレー学派の研究群が共通点も多く持つ一方で，相互にかなり異なった立場を並存していることを明らかにした。

本章では整理した形で文化地理学のこれまでの営為と主要なテーマの提示を意図した『論文集』を素材にして，この点をさらに検討してゆきたい。本書は，アメリカ最古の独立した地理学科博士課程を備えたシカゴ大学の出版会から出版された。それは，本書の編者，ワグナー＆マイクセルがともに当時シカゴ大学へ勤務していたからである。また，両者は，既述のようにともにサウァーから学位を取得した新進の文化地理学者であった。それゆえ本書は，文化地理学の書物として代表的かつ与えた影響も大きい。

しかしながら，前章の検討で明らかなように，両者は文化景観や具象的な物質文化を中心的分析対象として重視し，非物質文化や社会的条件を積極的には扱わない。この点にも留意して，『論文集』で意図された文化地理学の体系と，個々の論文の実際について，それぞれ検討しよう。

(1)　編者ワグナー＆マイクセルの意図

『論文集』には，冒頭に編者の総序論が載っており，編者の考える文化地理学のテーマや出版目的・編集方針などがわかる（第４表）。編者は，文化地理学のテーマを，文化・文化領域・文化景観・文化史・文化生態の５つとした。まず，文化とは，社会集団がその内部でのコミュニケ

第4表　P．ワグナー&M．マイクセル編『文化地理学論文集』の目次と著者の概略

構　成	著　者　名	本　書　で　の　タ　イ　ト　ル　注1）	ページ
総　序　論	編者 P．ワグナー& M．マイクセル	――――――――	1
《第一部》指　針	編　者	序	25
	C．サウァー	文化地理学	30
	R．プラット	アメリカにおける文化地理学の興隆	35
	M．ソール	人文地理学における歴史的説明の役割	44
	E．ロストルント	20世紀の不思議	48
《第二部》文化領域と文化の分布	編　者	序	55
	R．ヴァイス	文化境界と民族誌地図	62
	C．カルヴァルホ	言語の地理学	75
	P．フィッケラー	宗教の地理学の基本的諸問題	94
	I．リンド	地理学と地名	118
	W．ゼリンスキー	北東合衆国の地名のなかの総称用語	129
	F．ニッフェン	ルイジアナ州の諸家屋類型	157
	J．ブレック	東南アジアの多様性と統一性	170
	D．ローウェンサール	カリブ海社会の範囲と偏差	186
	C．サウァー	一文化的歴史的位置としての中央アメリカ	195
《第三部》文化の起源と伝播	編　者	序	203
	V．チャイルド	先史学者の伝播解釈	209
	H．ボーベック	地理学的観点による社会経済発展の主要段階	218
	I．バーキル	人間の習性と旧大陸の栽培植物の起源	248
	H．カトラー	新大陸の食物資源	282
	H．エプシュタイン	人間社会に役立たせるものとしての動物の家畜化の特色	290
	M．フリード	諸文化接触の中での土地保有・地理・生態	302
	D．スタニスラウスキー	方格都市の起源と拡大	318
	R．マーフィー	変化中心としての都市：西洋と中国	330
	E．カント	人口移動の分類と問題	342
	T．ヘーゲルストラント	イノベーションの波の伝播	352
《第四部》景観と生態	編　者	序	369
	R．ベアーズレーら	コミュニティパタンの機能的進化的意味	376
	M．ソール	生活様式概念	399
	D．ホイットルセィ	世界の主要農業地域	416
	M．ソール	食事の地理学	445
	H．コンクリン	焼畑に対する民族生態学的アプローチ	457
	E．アンダーソン	新植物と新植物群落の形成者としての人間	465
	A．セスティーニ	文化景観の発達の中における退行局面	479
	H．フルール	社会組織と環境	491
	A．ドウマンジョン	諸集落類型の起源と原因	506
	G．トレワーサ	植民期アメリカにおける農村集落の諸類型	517
結　論	C．サウァー	地球への人間の作用	539

注1）原論文とタイトルの異なるものがある。

原論文発行年	著者の概略	
——	P.ワグナー（1921～）	1953phD（バークレー）「ニコヤ：中央アメリカ低地社会の歴史地理」現カナダサイモンフレーザー大
	M.マイクセル（1930～）	1959phD（バークレー）「モロッコ北部地帯：農村集落とその土地への影響の研究」1958～シカゴ大
1931	1889－1975	1915phD（シカゴ）「ミズーリ州オザーク高原の地理学」1923－57バークレー校（カリフォルニア大）
1952	1891－1964	1920phD（シカゴ）「バミューダ諸島の資源と経済的利益」－57シカゴ大
1953	1880－1962	フランス，学位（モンペリエ）「地中海ピレネー，植物地理学研究」ドマンジョンの死後ソルボンヌ大
1956	1900－1961	1951phD（バークレー）「土着北アメリカにおける淡水魚と漁業の分布研究」1945－61バークレー校
1952		スイス，チューリヒ大民族学
1943		ブラジル大，現代史
1947	1893－1959	ドイツ
1953		スウェーデン
1955	1921－	1953phD（バークレー）「ジョージア州の人口（集落）パターン」ペンシルバニア大
1936	1900－	1930phD（バークレー）「コロラドデルタ」ルイジアナ州立大地理学・人類学名誉教授
1944	1904－	1932学位（ユトレヒト）1936－1946バークレー大勤務
1960	1923－	1943BS（ハーバード），1950MA（バークレー），1955phD（ウィスコンシン），現ロンドン大
1959		
1937	1892－1957	イギリス，先史考古学
1959	1903－	オーストラリア，学位1935，ウィーン大名誉教授
1951-52		シンガポール植物園理事
1954		ワシントン大植物学教授（当時）
1955		イスラエル，ヘブライ大農学部畜産教授（当時）
1952		コロンビア大人類学（当時）
1946	1903－	1944phD（バークレー）「メキシコミチョアカン州の歴史地理」テキサス大名誉教授
1954	1913－	1960phD（ハーバード）ミンガン大教授
1953	1902	スウェーデン，ルンド大名誉教授
1952	1916	スウェーデン，1953学位（ルンド大），1957－ルンド大人文地理学教授
1956		アメリカミシガン大人類学教授（当時）
1948		
1936	1890－1956	PhD（シカゴ），ハーバード大名誉教授
1952		
1954		コロンビア大人類学助教授（当時）
1956		ワシントン大植物学教授（当時）
1947	1904－	イタリア，フィレンツェ大教授
1947		イギリス，マンチェスター大教授（1930－1944）
1927	1872－1940	フランス，1905学位（ソルボンヌ）「ピカルディ地方」，1911－1940ソルボンヌ大
1946	1896－	1925phD（ウィスコンシン），ウィスコンシン大名誉教授
1956		

ーションのために案出したシンボルを意味する。地理学では外化したシンボルたとえば言語や，習慣的で制度的に枠づけられた行為などがその対象になるという。文化領域とはある文化の分布域を指し，領域の画定・領域内の文化要素の検討・異文化領域間の系譜の考察などが研究される。文化景観とは，社会集団が働きかける地域ないし地表の部分，空間内における具体的な地理的構成要素の典型的まとまりを指し，自然環境と人間社会双方の複雑な相互作用の結晶として生みだされる。諸景観のうち，植生に人間の影響が深く刻まれていることが多く，農地さらに集落景観の詳細な分析により，個々の特色ある生活様式を明らかにできる。文化史とは，各地の文化的継起及び文化の起源と伝播の歴史を指し，地名・言語・史料・家畜化や栽培化の生物学・語り伝え・考古学的手法などにより，文化の単独発生か伝播かをめぐる問題や伝播の経路などを扱う。また，人口移動研究とそれに関わる文化の研究もこれの重要課題である。古景観とその変遷の研究も重要な課題である。文化生態とは，文化領域や文化景観を形成しまた機能させる一連の出来事ないしその一部を指し，文化景観群の横断的検討により，ある現象を生じさせる必要条件を確定できるし，現実の諸プロセス（土壌の質の変化や人間集団の増加など）を直接発見，記述，分析することもある。

文化地理学者は，明瞭に文化を認識して研究することを要求する。そして，文化の違いにより生じる諸現象つまり文化というもののもつ意味を明らかにすることに関心をもつ。先の５つのテーマは相互関連の度合いが強いし，文化地理学者は常に５つのテーマを明らかにしようとする。それゆえ，全世界に存在する人間のつくりあげたものを概観した上で，誰がどこで何をいつどのように，と問いかける，と編者は言う。

以上から，編者の文化地理学観の特色をうかがうことができる。まず，対象とする文化を外化した文化に限定するか，あるいは外化していない文化の場合はその文化の何らかの側面が表にあらわれた場合のみを対象とする，という考え方である。次に，「誰がどこで何をいつどのように」は問うが，「なぜ」は問わないことである。これは，文化の機能考察に重点をおき，文化形成の意志決定については問わないことを意味する。

また編者は，これまで文化地理学者が方法論的言明より個々の実質的研究を好んだため，適切な手引書がなかった。従って本書はケーススタディより広範な関心をもち，かつ所収可能な長さの論文を採録したという。それらの論文を上述の５つのテーマ，実際には，指針，文化領域と文化の分布，文化の起源と伝播，景観と生態，結論の５つ，５テーマとの関連では３つに統合しなおして掲載している。そしてそれらについても，各部で要約することによって，全論文の掲載意図を読者に伝えている。従って，次にそれをみていこう。

【第一部　指　　針】

文化地理学研究の地理学全体の中での位置や，文化地理学がめざす研究方向に関する論文４本

を掲載した。4論文のうち，サウァーは，アメリカにおける自然と人間との関係学としての地理学の展開を批判し，文化景観の形態学，文化景観形成の文化プロセスの考察こそが地理学の課題であることを主張している。プラットは，環境決定論の崩壊とサウァー等の研究スタイル（広範で性急な一般化を避け，インテンシブな観察と目録作りから成るフィールド調査による個々の文化の歴史的説明）を評価しつつも，機能分析や一般化の必要性を強調している。ソールは，生態学的説明と歴史的説明との折衷の必要性を強調したもので，プラットと同一文脈で理解できる。ロストルントは，環境決定論者の誤りを踏まえた上で，彼らの諸説や一般化の内容自体に含まれる貴重な成果を今日の地理学の水準で正しく受け継ぐ必要性を強調している。以上の各論文のトーンの差は，環境決定論の興隆期から衰退期へという地理学全体の推移による点が大きいが，ともかくも文化地理学の体系化のために従来の個別研究のレベルを超えた一般化の必要を説く。

【第二部　文化領域と文化の分布】

編者によれば，文化領域をみいだし，その範囲を確定する問題が扱われている。その場合，どの文化要素が重要かについてまず留意しなければならない。その上で，それらの文化要素を指標にした文化領域の設定を論じるのである。その際，単一文化要素を指標とする場合と複数文化要素を指標とする場合を呈示する。そして最後に文化領域の形成過程について，社会集団による形成と長期的な移住と伝播に基づく形成が論じられる。

個別論文で述べていこう。まずR.ヴァイスの論文は複数の文化要素の重ね合わせから帰納的に文化領域を設定し，その境界線の意味をさらに考察している。次にC.カルバルホは言語要素，P.フィッケラーは宗教要素，I.リンドは地名要素とそれぞれ単一指標の場合である。W.ゼリンスキーは単一要素による分類ながら総称名辞の分布の検討によって文化領域の推移をも示唆する区分例である。F.ニッフェンの家屋形態を指標にした例もゼリンスキーに類似する。以上の単一文化要素を指標とした研究に対し，次の三論文は複数文化要素を指標とする。J.ブレックは東南アジアを対象に自然・文化要素の点での多様性と社会経済条件の同質性を述べる。D.ローウェンサールはカリブ島嶼社会の複数文化要素による文化領域設定を述べている。サウァーは長い時間スケールでの移住や伝播といった要因による文化領域の形成を述べている。

【第三部　文化の起源と伝播】

編者は，文化地理学者が，他のすべての文化研究者と同様，文化の発生と伝播や変容の問題解明に努めなければならないとする。その上で，それらに関する10本の論文を掲載する。10本はさらに4，2，2，2の4種類に分かれる。

まず，G.チャイルドは地理学と同じテーマをもつ考古学における先史時代の伝播研究で，人間集団の交渉史を明らかにしてくれる。次にH.ボーベックは世界的スケールでの社会・経済的発展を概観したもので，発展段階論に基づいて15世紀の世界の状況を図示し，各発展段階の特徴，

段階移行過程の契機，各段階の核心地について論じている。I.バーキルは旧大陸，H.カトラーは新大陸における栽培植物の起源と分布について述べている。これらの論文では，文化イノベーションを条件づけたり促したりする動機づけに対する関心は小さい。次にH.エプシュタインは家畜化の選択の一連の過程の検討を通じ，その要因として，社会的美的思慮が反映していることを結論づけている。M.フリードは，土地保有，地理条件，生態の研究を通じて，土地保有が社会組織の指数であり，土地支配に対する異社会システム間の争いの因子であることも明らかにした。これら2本は動機づけが文化イノベーションの伝播を規定する面を強調したものである。次の2本は都市に関するもので，D.スタニスラウスキーは方格都市の起源と拡散について検討しており，一方，R.マーフィーは都市が文化中心としてもつ機能の西欧と中国との差異に注目したものである。以上の歴史時代を主に扱ったものの他にも，現代の伝播に関する研究がある。Eカントは現代西欧の都市農村間人口移動を対象にして，伝播の重要なメカニズムの記述と，異なる文化領域では移動パターンの異なることを証明した。またT.ヘーゲルストラントは，定量的に，自動車・ラジオの伝播より一般的には技術革新の伝播を扱っており，文化領域の生成と変化の研究として重要であると，編者は言う。

【第四部　景観と生態】

編者は最後のサウァーの論文は結論にかかわるもので，第四部はそれ以外の10本とする。まずR.ベアズレー等の論文は，考古学的・民族学的証拠によって，コミュニティパターンが移動社会から定着社会に移行するにつれて複雑なものに変化し，それが機能的・進化的な変化と判断できることを検証したものとする。次のソールはヴィダル＝ドゥ＝ラ＝ブラーシュにより提唱された生活様式概念の定義・その有効性と限界を述べたもので，この概念は結局のところ，暮らしないし活動を意味する概念で，景観・生態研究上意義深いと述べている。D.ホィットルセーの論文はプロセスや発生の点への考察がなく，その点で文化地理学的分類として不十分であるものの，集約度や商品化の差異を考慮に入れた点が意義を高めたとする。次のソールの論文は食事の諸要素が文化的アイデンティティの象徴としてもつ意味を論じ，かつ健康と福利の点から食事，栄養の良悪の価値判断や飢餓という生態的不均衡などのテーマに言及する。以上から食事への注目は高く評価されるとする。次に，上述の議論の内容を具体的に例示する意図も含めて，人類学者H.コンクリンの論文が提示される。それは，フィリピンミンドロ島ハヌノー族の焼畑農耕のインテンシブな調査で，焼畑生態系の安定性を明らかにしたものである。次に，植物学者のE.アンダーソンの論文が示される。氏はサウァーとの共同研究者で，人間の居住・自然改変による随伴雑草の文化生態上の意義を，雑草の栽培植物化などの例をあげて示し，文化景観群の境界を知る一指標としての雑草の検討が意味をもつことや，人間による自然改変が広大で早い時期から進行しているのを明らかにした点で意義深いとする。またA.セスティーニの論文は文化景観の退歩的

局面を例示したものとする。次の３本は編者によると，集落発達のプロセスを理解することを目的とする点で共通する。具体的には，Ｊ．フルールの論文は，社会組織の発達と環境との関連を，世界各地の都市発達の比較により検討している。Ａ．ドゥマンジョンは農村集落の集村・散村形態の形成要因を自然・社会・農業経済から考察している。Ｇ．トレワーサの論文は，農村集落の形態と土地システムの要因分析を行ない，フロンティアへの投機的利益追求をする場合と宗教的な集団のまとまりとの違いをその要因と解釈する。

【結　　論】

サウァーの論文は本書のまとめに相当する。歴史的かつ比較による方法で，人間により遂行されてきた諸プロセスを明確化することが本書の目的であり，サウァーは文化地理学者が全人類史の期間にわたってこの研究を進めることを勧める。サウァーの論文の，気候の変化の人間に対する影響についての箇所は本書で扱われていないが，他の，移動，伝播，分化については本書に所収した諸論文がまさにそれにあたる、と編者は言う。　　（未　完）

註

(1) R. J. Johnston, "Philosophy and Human Geography", 1983

(2) 坂本英夫・浜谷正人編著，『最近の地理学』，1985，坂本執筆箇所pp. 1 －10

(3) Lienau u. Uhlig, "Materialien zur Terminologie der Agrarlandschaft Vol. 1-3", 1978, 1972, 1974
特に vol. 1

(4) 野間三郎，『近代地理学の潮流』，1963。水津一朗，『近代地理学の開拓者たち』，1974

(5) 生活様式論に関する近年の成果として，野澤秀樹，『ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ研究』，1988

(6) P. L. Wagner & M. W. Mikesell, eds, "Readings in Cultural Geography"

(7) 久武哲也，アメリカ文化地理学の成立と発展 ― C. O. サウァーとバークレー学派の役割 ― ，「人文地理」，39－４，1987，pp. 47－75のP. 50。

(8) 佐々木高明，「人文地理」，15－１，1963，pp. 109－110

(9) 前掲7)，久武，バークレー学派の転回期と潮流 ― サウァーにおける「景観の形態学」をめぐって ― ，「甲南大学紀要文学編35社会科学論集」，1980，pp. 36－76。同，サウァー ― CarlO. Sauer,（藤岡謙二郎・服部昌之編，『歴史地理学の群像』，1978所収）pp. 90－114。服部昌之，欧米における歴史地理学的研究の動向，「人文研究」32（第７分冊）1980，pp. 27－57が我が国でのもの。

(10) H. Brookfield, Questions on the Human Frontiers of Geography, Economic Geography, 40-4, 1964, pp. 283-303
R. S. Platt, ed, "Field study in American Geography : The Development of Theory and, Method Exemplified by Selections", 1959, p. 405

M. W. Mikesell, ed, "Geographers Abroad : Essays on the Problems and Prospects of Research in Foreign Areas", 1973, p. 296

(11) サウァー個人の生涯・研究については次のものがある。J. Leighly, ed, Land and Life : A Selection of the Writings of Carl Ortwin Sauer, 1963 (これはサウァーの退官後にJ.ライリーが軌跡を知るのに適した著作を簡便な選集としてまとめたもの)。久武哲也, 前掲9。また紙碑として, J. Leighly, Carl Ortwin Sauer, 1889-1975, AAAG66-3, 1976, pp. 337-348, J. J. Parsons, Carl Ortwin Sauer, 1889-1975, Geogr. Rev, 66-1,1976, pp. 83-89。

バークレー校については次のものがある。J. Leighly, Berkeley : Drifting into Geography in the Twenties, AAAG69-1, 1979, pp. 4-9, J. J. Parsons, Berkeley : The Later Sauer Years, AAAG69-1, 1979, pp. 9-15, Historical Geography Newsletter6-1, 1976, pp. 1-81 (サウァーとA.C.クラークの死に対して組まれた特集号), 久武, 前掲9。

(12) 土着アメリカとくにスペイン系の影響をうけた土着アメリカの意である。

(13) アシスタントではなく独立していくつかの授業科目を開設・担当する一方で卒業のため必要な論文を書く職

(14) 動植物地理学の論文は, 16, 18, 20, 21, 23, 24, 25であるが, これらの研究の中でも長い時間スケールでの変化を画期ごとの対比で明らかにしようとするものがある。

(15) C. Sauer, Erhard Rostlund, Geogr. Rev.52-1, 1962, pp. 133-135

(16) この点は久武, 前掲7)も指摘している。

(17) P. Vidal de la Blache, Les genres de vie dans la géographie humaine, Annales de Géographie Tome 20, 1911, pp. 193-212, pp. 289-304

(18) Max. Sorre, "Les fondements de la géographie humaine. Tomeii : Les fondements techniques de la géographie humaine", 1948

(19) D. Cosgrove, "Social Formation and Symbolic Landscape", 1984

(20) ibid, Cultural Geography, in "The Dictionary of Human Geography : Second Edition", ed, by R. J.Johnston, 1986, pp. 86-88

(21) R. West, Carl Sauer's Fieldwork in Latin America, 1979, pp. 22-25, pp.150-155

(22) Allen D. Bushong の資料 (unpublished) による。同資料については, 久武哲也先生にご教示いただきました。お礼を申し上げます。

(23) シュペートマン地誌学の主張にみるように, 実際にはこのタイプの地誌的モノグラフは多い。

資料1　『カリフォルニア大学 地理学刊行物』(UCPG) の目次一覧

【第1巻】		
1　Russian 河，カリフォルニア海岸地帯の特徴的河川	1913	R. S. Holway
2　カリフォルニア州バークレーの降水	1913	W. G. Reed
3　地形学的には未完成の（形成途上にある）サンフランシスコ湾口部	1914	R. S. Holway
4　カリフォルニアの降水	1914	A. G. Mc Adie
5　1887年7月1日～1912年6月30日のバークレーでの気象学的観察の25年一覧	1914	A. O. Leuschner
6　カリフォルニア州バークレー気象局の1913年6月30日までの1年間に関する報告	1914	W. G. Reed
7　Lassen 峰の最近の火山活動に関する抄報	1914	R. S. Holway
8　Yolo 郡 Cache 湾の地形学的特徴	1916	D. M. Durst
9　カリフォルニア州バークレー気象局の（1913年7月1日から）1914年6月30日までの1年間に関する報告	1916	W. G. Reed
10　カリフォルニア州バークレー気象局の（1914年7月1日から）1915年6月30日までの1年間に関する報告	1917	W. G. Reed
【第2巻】		
1　1887年7月1日～1917年6月30日のバークレーでの気象学的観察の30年一覧	1919	B. M. Varney
2　景観形態学	1925	C. O. Sauer
3　気候学における図表現研究。Ⅰ.気候分類の図表現	1925	J. B. Leighly
4　カリフォルニアの気候	1926	R. J. Russell
5　リオグランデ川（Guapay 川）の南部，東ボリビアアンデス	1926	O. Schmieder
6　正積円筒（円柱）投影法	1927	C.W.Thornthwaite
7　北西 Great Basin の地すべり湖	1927	R. J. Russell
8　パンパ，自然にそれとも文化的にできた草原か？	1927	O. Schmieder
9　低部カリフォルニアの研究。Ⅰ. San Fernando de Velicatá の遺跡と文化	1927	C. O. Sauer & P. Meigs
10　植民地期のアルゼンチンパンパの変容	1927	O. Schmieder
11　北西 Great Basin Surprise 谷の地形	1927	R. J. Russell
12　Tucumán の史跡地理学（歴史的諸痕跡を活用した地理学，考古地理学）	1928	O. Schmieder
13　気候学における図表現研究。Ⅱ.年気候周期の図化におけるダイアグラムの極（原点・軸）様式	1928	J. B. Leighly
14　低部カリフォルニアの研究。Ⅱ. Guadalupe 谷の Russian Colony	1928	O. Schmieder
【第3巻】		
1　スウェーデン Mälardalen 諸都市。都市形態研究	1928	J. B. Leighly
2　Tahoe 湖南部シェラネバダ山脈の氷河地形	1929	W. D. Jones
3　ブラジルの文化中心	1929	O. Schmieder
4　カリフォルニア半島域の地形	1929	C. Sauer
5　Chiricahua 域における盆地と山脈の形態	1930	C. Sauer
6　中央カリフォルニア湾の夏の海霧	1930	H. R. Byers
7　南東アリゾナの Pueblo 族居住地（遺跡）	1930	C. Sauer & D. Brand
【第4巻】		
Tzapotec インディアンと Mije インディアン（メキシコ Oaxaca 州）の集落	1930	O. Schmieder
【第5巻】		
1　合衆国の乾燥気候。Ⅰ.気候地図	1931	R. J. Russell
2　低部カリフォルニアの研究。Ⅲ.コロラドデルタの初期（原初的な）文化景観	1931	F. B. Kniffen

3 Sonora の先始集落。特に Cerros de Trincheras に関して	1931	C. Sauer & D. Brand
4 低部カリフォルニアの研究。Ⅳ. コロラドデルタの自然景観	1932	F. B. Kniffen
5 合衆国の乾燥気候。Ⅱ. 1901～1920年における乾燥・砂漠気候の頻度	1932	R. J. Russell
【第6巻】		
1 河川流における攪流の形態学上の重要性に関する理論について		J. B. Leighly
2 南カリフォルニア, San Gorgonio Pass の地形		R. J. Russell
3 カリフォルニア州 Anaheim のドイツ人植民		H. F. Raup
4 マルケサス諸島の気象：1929～1932年の太平洋昆虫調査によってマルケサス諸島でなされた気象観察のノート	1933	J. B. Leighly
5 気候学における図表現研究。Ⅲ. 年気温周期の極大値日付についての図上での級数式案	1934	J. B. Leighly
6 毎年3月の気温の極大値, 特にカリフォルニアに関して		J. B. Leighly
7 中世 Livonia 諸都市		J. B. Leighly
8 カリフォルニア州シェラネバダ山脈の洪積世氷河の研究（1939年翻訳）		J. E. Kesseli
9 イギリス地理学者と17世紀におけるアングロアメリカのフロンティア	1944	F. Mood
【第7巻】		
低部カリフォルニアにおけるドミニコ派伝道区のフロンティア	1935	P. Meigs
【第8巻】		
1 カリフォルニア州 San Bernardino ：集落と通過地点都市の成長	1940	H. F. Raup
2 ブルガリア系トルコ人のトルコ的な集落形成（1950～1953）	1957	H. L. Kostanick
3 アルジェリアとサハラ砂漠の交易ルート	1957	B. E. Thomas
4 アリゾナ州の製造業	1962	T. Mcknight
【第9巻】		
原住民の北アメリカにおける淡水魚と漁業	1952	E. Rostlund
【第10巻】		
1 Capitola-Watsonville 域の海岸・河岸段丘	1953	G. S. Alexander
2 Baja カリフォルニアの岬地域の地形研究	1954	E. H. Hammond
3 サンフランシスコ湾域における夏の霧の気候	1956	C. P. Patton
4 中央 Baja カリフォルニアにおける地形, 気候, 考古の後期洪積世以降の変化	1957	B. A. Arnold
【第11巻】		
シェラネバダ山脈の積雪と気候	1955	D. H. Miller
【第12巻】		
1 サンアンドレアスとプロビデンシア：カリブ海西部の英語圏島嶼	1956	J. J. Parsons
2 ベネズエラ, マルガリータとその隣接諸島の地理学	1958	C. S. Alexander
3 ニコヤ：文化地理学	1958	P. L. Wagner
4 ニカラグアの高地松林：文化植物地理学研究	1961	W. M. Denevan
【第13巻】		
【第14巻】		
北部モロッコ：文化地理学	1961	M. W. Mikesell
【第15巻】		
南部農業におけるラバ	1963	R. B. Lamb
【第16巻】		
アングロアメリカにおける野生化した家畜	1964	T. Mcknight
【第17巻】		
モドック郡：カリフォルニア火山台地における地理的時間の連続性	1965	R. W. Pease

【第18巻】 西インド諸島，外リワード諸島の植物，動物，人間：アンティグァ島，バーブダ島，アングイラ島の生態学的研究	1965	D. R. Harris
【第19巻】 東南アジアの焼畑	1966	J. E. Spencer
【第20巻】 カリフォルニアの道路沿いの荒れた植生	1970	R. E. Frenkel
【第21巻】 人なつっこい野生動物：オーストラリアにおける野生化した家畜の調査	1976	T. Mcknight
【第22巻】 植民期マニラ：スペイン風の都市化の状況と形態発生のプロセス	1977	R. R. Reed
【第23巻】 チリ北部中央地帯の自然植生の破壊	1979	C. J. Bahre
【第24巻】 コスタリカ，コルコバード国立公園における特定熱帯樹種の再生	1981	S. R. Herwitz
【第25巻】 ケイマン諸島の海岸植生：比較植物地理学研究	1982	J. D. Sauer
【第26巻】 イデオロギーの建築：韓国，済州島への新儒教主義の刻印	1987	D. J. Nemeth